

第52回(2011年度)動物愛護の作文コンテスト

《環境大臣賞》

小学生の部

◎命を食べるということ

梶山 涼介

常葉学園大学教育学部附属橘小学校5年

「それでは、ナイフを入れる人。」
 キャンプスタツプが、みんなに
 聞く。ぼくは、どうしても動け
 ない。
 だれか：手を挙げてくれ！
 と願いながら、足をしばられつ
 るされた二ワトリを見ていた。
 お母さんの言葉を思い出す。
 「いただきますっていうのは、命
 を、自分の体の中に、いただ
 くっていう事なんだよ。
 食べますっていう事じゃない
 んだよ。」
 この肉、魚だけじゃない、お
 米も、野菜もみんな生きてたん
 だから。
 ちゃんと両手を合わせて、す
 わりなさい。」
 いただくってことは、殺す、つ
 て事なのだ。ぼくは思った。

今、目の前にいる白い鳥は、
 この夏の間みんな世話をして
 きたうちの1羽だ。いっしょに
 追いかけてもした。肩にのら
 れたりもした。朝早くから起さ
 れたりもした。エサもあげた。
 うんちでいっぱいの小屋のそ
 うもした。片手で持って、写真
 もとった。
 この肉だけが特別じゃないん
 だ。分かっていてもいろいろな
 気持ちがあるし、泣きそうだ
 った。
 ぼくたちを、支えてくれる食
 物となる動物がいる。命をいた
 だくことは、こういうことなん
 だと、少しだけ分かった気がす
 る。
 畜産の人の話をこのところ
 ニュースでよく見た。
 殺処分。みんなおじさん達は
 泣いていた。二ワトリや牛やぶ
 いた。すべて食べるために育て
 ているのに殺すのか、ぼくは分
 らなかった。人が安く、食べる
 ためにいっばいせまい所で育て
 てるから病気になるんだって
 思ってた。ニュースの画面から
 見ている、かわいそうだなっ
 て思うぐらいで分からなかった。
 ぶたも牛も、魚もみんな生き
 ている。ぼくたちは、その命を
 引きついで生きている。
 さっきまで、いた二ワトリは、
 トリ肉になった。ぼくは、忘れ
 ないようにしようと思う。
 「いただきます」
 しっかりと両手を合わせて、あり
 がとうって言って、残さずいた
 できます。ぼくは、この夏、命
 をもらうことを教えてもらった。

◎ロータリーの犬

島田 佳林

山形大学附属中学校3年

中学生の部

「あつ、危ない！」
 思わず私は目を覆った。恐る恐る目を開け
 ると、尻尾を丸めた薄茶色の犬が、寸前で
 止まったバスの目の前を、慌てて横切つて
 行く所だった。私は胸を撫で下ろした。こ
 れで二度目だ。この前の雨の日、たくさん
 の車の間を縫うようにチヨロチヨロと歩い
 ていたあの犬だ。今にもひかれそうだった
 ので、私は内心気が気でなかった。駅へと
 急ぐ人の波は、ずぶ濡れの犬を避けながら
 流れて行く。しばらく私は目で犬を追つて
 いたが、やがて、街路樹の向こうへと見失
 ってしまった。

そして、今日もまた……。やはりその犬
 は、何度もひかれそうになりながら、ロー
 タリーをぐるぐる回っている。

「ほっとけない！」

気付いたら、私は犬のそばにいた。

古ぼけた赤い首輪をしていた。

「危ないよ、こっちにおいで。」

私は首輪をつかんで、ぐいっと歩道に引き
 寄せた。犬はクリツとした愛らしい目で私
 を見上げ、尻尾を振った。周りの大人達は、
 足早に駅へと向かっている。首輪をよく見
 ると、電話番号らしきものがうつつら書い
 てあった。

夏休みの間滞在している祖母の家に、私
 は犬を連れて帰った。私は祖母に今までの
 いきさつを話してから、飼い主に電話をし
 た。

「きつと心配しているんだろうな。」

知らせを聞いたときの飼い主の喜ぶ顔を想
 像しながら、私は呼び出し音を聞いていた。

「はい、もしもし。」

少しかすれた女性の声だった。

「えつ、犬？ ああ……犬ね。」

予想外の冷静な声だった。明らかに面倒
 臭そうな話し振りに、私は驚き、ひどく落
 胆した。明日、引き取りにきてもらうと約
 束して受話器を置いた。

翌日現れたのは、不機嫌そうな表情の中
 年の女性だった。さっさと車に犬を乗せる

と、そそくさと帰ってしまった。

数日後、再び駅を通りかかった時、私は
 信じられない光景を見た。あの犬だ。よく
 見ると、今度は首輪をしていなかった。私
 は迷わず駆け寄った。犬は私に気がつく
 と、尻尾を振りながら近づいてきた。やはり、
 あの犬だった。私はすぐに、あの女性に電
 話をかけた。複雑な気持ちだった。

「もしもし、また犬が駅にいるんですが……。」
 「もう要らないのよ。余計なお節介しな
 いでちょうだい。欲しかったらあげるわよ。」
 ガチャン。電話が切れた。私は呆然と立
 ち尽くした。少しの間、通り過ぎる人を眺
 めていたが、我に返って祖母に電話をした。

しばらくして、見知らぬ車に乗った祖母
 が現れた。運転していたのは、祖母の古く
 からの友人だった。私は犬をちらりと見る
 と、車に乗るのをためらった。

「大丈夫。その犬も一緒にね。」

おばさんが犬を撫でると、犬はペロリとそ
 の手を舐め、嬉しそうに尻尾を振った。

「よし決めた。この犬、やっぱりもらおうわ。」
 後で知ったが、祖母が犬の事をおばさんに
 頼んでいたのだった。おばさんの横顔は、
 とても頼もしかった。車窓から差し込む夏
 の日差しを受けて、私は目を閉じた。車に
 揺られていると急に涙が溢れてきた。複雑
 な涙だった。

身勝手な人も、善意の人もいる人間社会
 の中で翻弄される小さな命。それでも人間
 を信頼している真っ直ぐな瞳を見て、私は
 逆に救われる思いがした。最後まで諦めず
 に頑張れば、事態は好転することもあるの
 だ。

万物の霊長である人間には動物への責任
 があると共に、大いなるサイクルの一員に
 過ぎない面もある。多くの生物を守る事は
 廻り廻って自分達自身を守ることになるの
 ではないだろうか。第二のロータリーの犬
 を生まないために、何ができるかじっくり
 考えたい。